

ひょうご 水百景

No.2-2 住吉川（神戸市東灘区）

～流石に刻んだ石碑が伝える阪神大水害～



写真-1 水道橋付近から下流を望む（左手のマンションがオーキッドコート）

■ 「日本一の長者村」だった住吉川沿川地域

写真-1は、山手幹線の水道橋付近から住吉川下流方向を撮影したもので、左岸側のマンションは平成6（1994）年に完成した「オーキッドコート」です。かつてここには、日立製作所の創業者で久原（くはら）財閥の総帥・久原房之助の大邸宅があったそうです。明治37（1904）年、住吉川左岸の本山村に3万坪を超える土地（オーキッドコート一帯）を取得し、明治41（1908）年そこに洋館や和館等の大豪邸を建て昭和3（1928）年頃まで住んでいたとか。マンションの敷地はその一部だそうです。因みに、オーキッドコート前の住吉川に架かっていた「久原橋」は、久原氏が国鉄住吉駅まで通うために自前で架けたもので、現・久原橋（昭和41年10月架）は、その橋名を引き継いでいます。

■ 「日本一の長者村」を襲った山津波の置き土産

昭和13（1938）年7月5日、想像を絶する山津波によって六甲山麓では多くの尊い命が失われました。住吉川流域では、死者44名、家屋の流失・全壊333戸、家屋の半壊1,919戸といった状況で、「日本一の長者村」だった住吉川一帯を襲った山津波も、多くの尊い命を奪い住居を破壊しただけでなく、膨大な量の巨石を置き土産に残していました。

住吉川周辺を歩いていると、巨石を積み上げた石垣が目につきます。これは、土石流災害の経験を踏まえて多くの屋敷が、敷地を嵩上げて屋敷を守るため、流れて来た巨石を利用して石垣を築いたものです。

右の写真-2のような石垣が続く街並みは、記念碑以上の迫力をもって、山津波の恐ろしさを今に伝えています。



写真-2 流れて来た巨石で築いた石垣（東灘区住吉本町）

■ 流石に刻み阪神大水害を伝える

表六甲河川の中でも特に甚大な被害があった住吉川流域では、流出してきた巨石に水害の記憶を刻み込んだ記念碑がいくつかあります。

① 『水災記念』の碑

- ・形 状：幅0.7m×高さ1.9m×奥行0.5m
- ・建立者：衣笠敬治・王木和作・松野幸平
(旧武庫郡住吉村：住吉川右岸)
- ・建立年：昭和 14 (1939) 年 4 月
- ・所在地：神戸市東灘区住吉台地先

西谷川が住吉川に合流する地点にある落合橋のすぐ東に建っています。石碑は、山津波で流出してきた巨石でつくられており、石碑の台座側面には、当時の洪水の最高水位(「当時出水高」)が刻まれています(写真-4)。石碑のすぐ東側を流れる住吉川の河床から約6mの高さです。

今でいう「まるごとまちごとハザードマップ」の阪神大水害版です。

なお、石碑は道標も兼ねていて、「水災記念」の文字の両側に「右有馬道 左六甲道」と刻まれています(写真-3)。



写真-3 『水災記念』石碑正面



写真-4 『水災記念』石碑右側面

② 『有備無患』の碑

- ・形 状：幅 1.0m×高さ 2.7m×奥行 1.2m
- ・建立者：本山村(現・神戸市東灘区、住吉川左岸)
- ・建立年：昭和 16 (1941) 年辛巳(か)のとし 春
- ・所在地：神戸市東灘区西岡本 3 丁目 野寄公園内
- ・刻 字：海軍大将 末次信正^{※1}書(正面)
(背面には本山村村長ほか工事関係者の名が刻まれている)
- ・下の碑文は、写真-5 の右下にある銘碑の訳文
(碑文はすべて漢字で書かれている)

※1 末次信正(すえつぐのぶまさ)：1880～1944 年。山口県に生まれる。海軍軍人・政治家。昭和 9 (1934) 年 3 月海軍大将に就任。昭和 12 (1937) 年 12 月の第 1 次近衛内閣では内閣参議から治安の最高責任者たる内務大臣に就任。その半年後に阪神大水害が発生し、現地を視察している。なお、第 3 次近衛内閣が退陣した昭和 16 (1941) 年 10 月、末次は全国治水砂防協会会長であった。



写真-5 野寄公園内にある『有備無患』の碑

時に昭和十三年戊寅の年 晩春より長雨が降り続き、七月五日になって、未だかつてない豪雨が襲ってきた。六甲の山々は山津波を起こし、山腹はまるで滝のように崩壊し、それぞれの河川は一斉に氾濫した。濁流は滔々として流れ、崩れ落ちた巨岩も累々と重なり、土砂や木とともに荒れ狂い、ゴウゴウとどよめいた。たちまちのうちにあたりは荒野と姿を変えてしまった。

痛ましいことに、死者は十一名 傷ついた者はどれほどか分からない。加えて、流失・全半壊の家屋は七百棟あまり、埋没・浸水したものは実に壹千五百棟あまりであった。

ああ、その凄惨なありさまは表現することができない。この報道が天子の耳に達し、畏れ多くも侍従を派遣なされ、その上、下賜金まで賜わった。天子の恩愛はことに優れたものであった。この恩情に対して、感激の涙にむせぶしかなかった。

考えてみるに、自然の威力は強大なものである。今回の洪水については、我々としてはただ禍を転じて福とする方法を考える以外にはない。ここで村中の者が心を一つにして、復興に努力し、賢明に努めて怠ることなく、一年あまりでようやく復興事業も完成した。

人間の力もまた軽んずることはできないものである。ここにこの碑を建て、後世への手本の記念とするものである。

昭和十六年辛巳春
本山村長 松田七右衛門

③ 『禍福無門』の碑

- ・形 状：幅 4.0m×高さ 3.0m×奥行 2.5m
- ・建立者：武庫郡住吉村（現・神戸市東灘区、住吉川右岸）
- ・建立年：昭和14（1939）年12月
- ・所在地：神戸市東灘区住吉町3丁目 住吉学園内（旧観音林倶楽部敷地内）
- ・刻 字：末次信正書

「禍福無門（からくむもん）」とは、不幸や幸福がやってくるための決まった入り口があるわけではなく、心がけ次第で不幸にも幸福にもなるということ。「禍福門無し、唯人の招く所なり」を略した言葉だそうです。

台座前面に刻まれた碑文には、「…惨害ノ現状ノ一部ヲ当時ノ儘ニ遺シ親シク惨状ヲ視察セラレシ末次内相ノ扁額ヲ流巖ニ刻シ以テ永ク後ノ世ノ鑑戒タラシメントス」とあるように、流出してきた巨石（約30t）に後世への教訓とする碑文を刻み、建立されたものです（写真-6）。

碑に用いた巨石は水害時のままの状態で台座を築いているようで、土砂で埋まってしまった当時の状況を伺い知ることができます。「濁流土砂奔馬ノ如ク荒レ狂瀾怒涛幾千貫ノ巨巖唸リヲ生ジテ飛ビ…」という碑文とともに当時の山津波のすさまじさを伝えています。



写真-6 住吉学園内の『禍福無門』の碑

④ 『常二備へヨ』の碑

- ・形 状：幅 0.8m×高さ 2.5m×奥行 0.8m
- ・建立者：甲南尋常小学校
- ・建立年：昭和 18（1943）年 7 月 5 日（水災5周年）
- ・所在地：神戸市東灘区住吉本町 1 丁目 甲南小学校内
- ・刻 字：平生釰三郎※2 書
- ・碑 文：校長・堤恒也

台座前面に刻まれた碑文には「堅牢ナル校舎ヲ再築茲ニ復興記念ノ碑ヲ建テ以テ将来ノ万全ヲ期スト云フ」とあるように、阪神大水害で大きな被害を受けた甲南尋常小学校の再築を記念して、流出してきた巨石を使用し建立されたものです（写真-7）。

また「…六甲山系未曾有ノ山津波ヲ起シ土砂崩壊巨岩流奔諸川ヲ埋ム住吉川其ノ害最モ著シク洪水兩岸ニ溢レテ本校ヲ襲ヒ校舎殆ド破壊シ…」とあるように阪神大水害の凄まじさと住吉川に面して建てられていた同校の受けた被害の大きさを記しています。

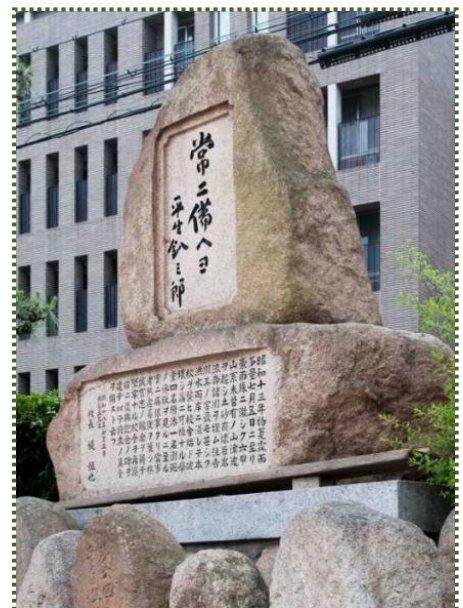


写真-7 『常二備へヨ』の碑

※2 平生釰三郎（ひらお はちさぶろう）：慶応2（1866）年～昭和20（1945）年。

実業家・教育者・政治家。美濃国加納藩（現・岐阜市）生まれ。高等商業学校（現・一橋大学）を首席で卒業。兵庫県立神戸商業学校長を経て、明治27（1894）年東京海上保険（現・東京海上日動火災保険）に入社、同社再建に貢献する。28歳で東京海上に入社してから58歳で引退するまでの30年間東京海上で働き、日本の海上保険の礎を築いた。

引退後は現・甲南大学、甲南高等学校、中学校、甲南病院などを設立し、学校や病院の経営を通じて念願だった社会奉仕に取り組んでいたが、昭和8（1933）年、川崎造船所（現・川崎重工業）が経営危機に陥ると、この危機を救えるのは平生以外にはいないと債権者や実業界から懇望され社長を引き受ける。社長を引き受けるにあたって出した二つの条件が、「一つは、任期を会社再建の目処をつけるまでの2、3年とし目処がつけば職を辞すこと。もう一つは、その間の報酬は一切受け取らないこと」であった。破綻寸前だった川崎造船所は平生が社長に就任してわずか2年あまりで、利益が3倍近く伸び、再建を成功させた。

その後も、周りから推される形で貴族院議員、文部大臣、日本製鐵会長などを歴任する。灘購買組合（わが国初の生協）の設立にも尽力。甲南学園の創立者でもある。



写真-8 平生釰三郎

（Wikipedia「平生釰三郎」から引用）

⑤ 『文豪谷崎文学碑』

- ・形 状：幅1.5m×高さ1.3m×奥行0.5m
- ・建立者：本山第二小学校
- ・建立年：昭和60（1985）年7月7日
- ・所在地：神戸市東灘区西岡本1丁目
本山第二小学校正門横

昭和8（1933）年に開校した本山第二小学校は、開校5年目に阪神大水害に見舞われました。水害の後、流石を利用し職員の労働奉仕により「水禍記念園」という名の築山が造られたそうです。

築山はその後なくなりましたが、昭和60（1985）年、谷崎潤一郎の生誕百年を記念してか、残された石に小説『細雪』の一節を刻んで『文豪谷崎文学碑』（写真-9）が建てられています。



写真-9 文豪谷崎文学碑

「今朝は妙子は夙川ではなしに、午前中に本山村野寄の洋裁学院へ行く日だったので、これぐらみな雨何でもあれへん、水が出たら却って面白いわ、などゝ冗談を云ひ云ひ出て行ったのを、止めないでしまった。……」

彼が腰かけてゐる席から山手の方を望むと、ちょうど本山第二小学校の建物の水に漬かっているのが真北に見え、一階南側に列んでゐる窓が恰も巨大な閘門のやうに夥しい濁流を奔出させてゐるのであったが……」

谷崎潤一郎『細雪』より

写真-9の文学碑は歩道から見えますが、道路（山手幹線）に背を向けているので、校内に入らないと正面からの写真は撮れません。仕方なく学校に電話して事情を話すと、しばらくして先生が出て来られて門扉を開けてくれました。

写真-7を撮るときも、甲南小学校の門前でインターホン越しに守衛の方に事情を話して職員室に案内していただき、職員の方の案内で記念碑を撮らせていただきました。

小学校東側のフェンス越しに望遠で撮る手もありましたが、グラウンドでは小学生たちが体育の授業中で、「へんなおじさん」に間違われても困るので正攻法で行きました。

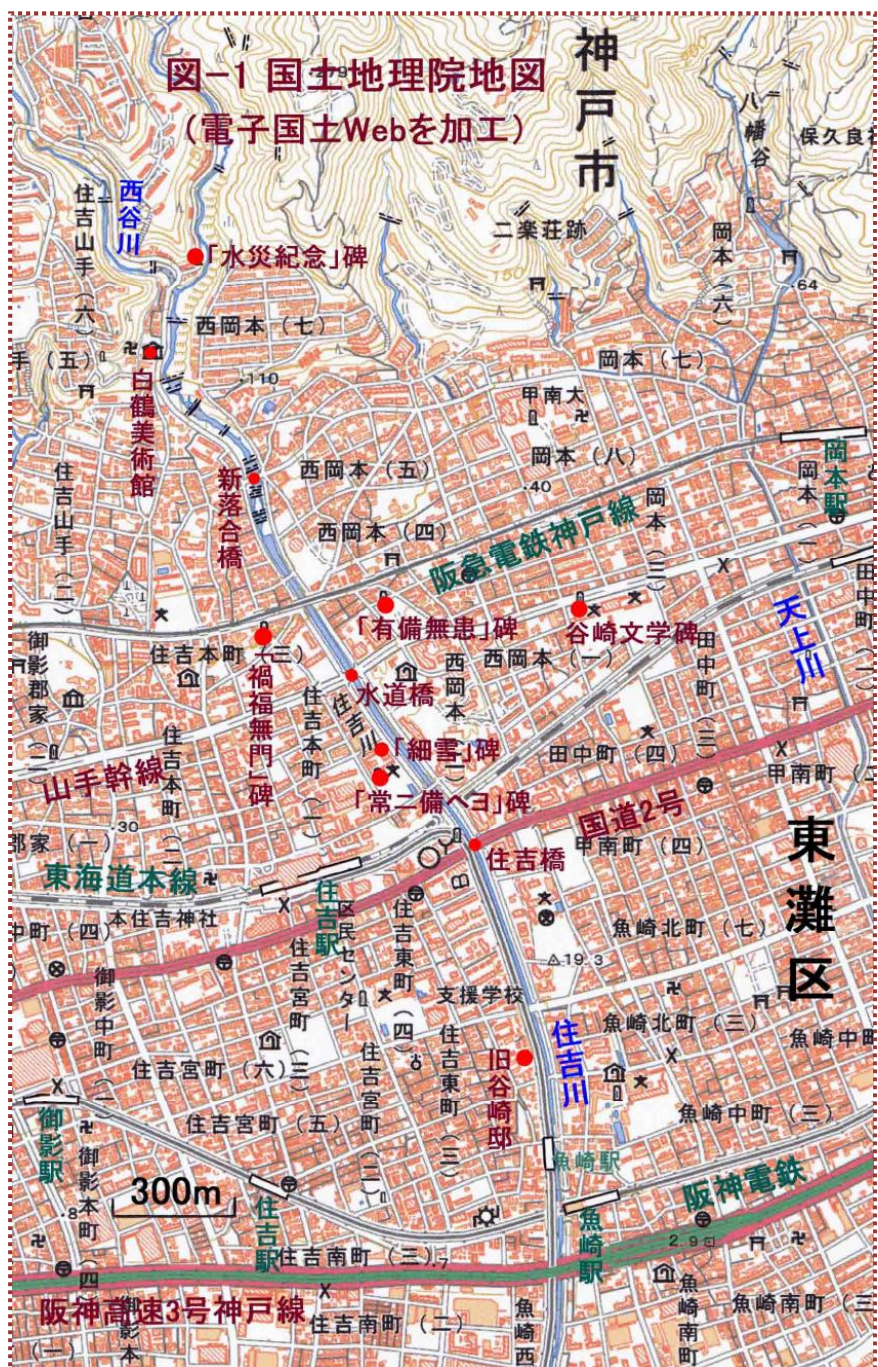


図-1 住吉川周辺の地図

■ モノローグ

災害の恐ろしさも、時間の経過とともに人々の記憶から忘れ去られてしまいます。忘れてしまうと、災害に備えることは覚束なくなります。二度と災害の苦しさ、辛さを経験しなくて済むように、災害をリアルに後の世に伝えていくことも大切なことのひとつです。

ここに掲載した石碑は、災害により大切な家族を失った悲しみ、それを乗り越えて復興を成し遂げた人たちの思いを次代の人々に伝えるために建立されたものです。

時に自然現象は、わたしたちの想像をはるかに超えることがあります。技術を過信することなく自然とうまくつきあって減災に努めていくことが必要です。これからの災害対策を考えると、ともすれば見過ごされてしまいがちな「碑」に今一度目を向けて、建立した人々の思いを聴くことも、減災につながる大切なことではないでしょうか。

ナニワイバラ（難波茨）

バラ科バラ属で、名は江戸時代に大坂（難波）の植木商人が中国から輸入して広めたためこの名が付いた。5月～6月に芳香がある白い花を咲かせるツル性の常緑低木。ツルから伸びた小枝に、かすかに梅の花に似た香りのある花が付く。花弁は5枚。ハート型のやや厚みのある白い花弁で、大きさは約6～8cmと大き目。茎は10mにもなり、生育も早く1年で50cmくらい伸びることもある。ツル性なので壁や柱などに添って上に伸び、茎にはかぎ状の強いトゲがある。葉は深緑色で光沢があり、バラの中では固めである。冬に落葉することはない、小葉は3～5枚、長めの楕円形で長さ3～5cmである。丈夫で耐寒性があり良い香りがある。オーキッドコート前の住吉川護岸に道路から垂れ下がるように咲いていた（写真-1&10参照）。



写真-10 住吉川の護岸に垂れ下がるように咲いていたナニワイバラ（写真-1も参照）

【参考文献】

- 1 『旧主要邸宅・御影界隈テクテク歩き～久原房之助邸』 いにしえのわが町 HP
<https://www.eonet.ne.jp/~mikage-club/teitaku.html#hisahara>
- 2 『六甲山の地理』 田中眞吾編著 昭和63年7月
- 3 『砂防の石碑～碑文が語る土砂災害との闘いの歴史』 特定非営利活動法人 土砂災害防止砂防広報センター 平成10年5月
<https://www.sabopc.or.jp/images/hibun007.pdf>
- 4 『地理・通巻720号（災害に立ち向かう地理教育 第22回「阪神大水害の被災と伝承～住吉川流域における記念碑を中心に～」』
川崎浩二郎 地理教材研究会 平成27年7月
- 5 『禍福無門』 四字熟語辞典ウェブ辞典 令和7年版
<https://yoji-jukugo.com/%e7%a6%8d%e7%a6%8f%e7%84%a1%e9%96%80/>
- 6 『谷崎潤一郎全集第19巻「細雪」中巻』 谷崎潤一郎 平成27年6月
- 7 『末次信正、平生釦三郎』 フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』
- 8 『ナニワイバラの育て方！剪定方法や冬越しなど管理のコツを解説！』 BOTANICA 令和2年8月更新
<https://botanica-media.jp/828>

※発行：平成23年7月 『ひょうご水百景』 No.2

改訂：令和8年4月 『ひょうご水百景』 No.2-2